

1 単元について

(1) 児童の発達と文章理解について

4年生という時期における児童の発達を考えると、他人を意識し始めるとともに好き嫌いや利害関係が自己の判断基準として明確化されてくる時期であると同時に自分の考えにこだわりを持って強く表現し始める時期でもあると考えている。そこで、このような時期の児童に対し、自分なりの考えを持ち、進んで話し合いに参加し、互いの考えや思いをしっかりと伝えあい、その活動の中で互いの考えを認め合いながら切磋琢磨し学習を進めていくことが重要な学習要素の一つではないかと考えた。

「話し合い活動」では「自己の考えを出し合い聞き合う過程で、考えを統合したり修正したりすることで考えを深化させていく」という活動が、学習内容をより高次元・多次元なレベルへと練り上げ積み上げていく過程での重要な一要素であると考えた。

また、自分の考えや思いを「文章化すること」も重要であると考えている。それは、考えを持つために書く。その考えをもとにした話し合いの結果をまとめるために書く。また、そこで新たに芽生えた疑問点や課題を書く。というような、課題作成(疑問)・課題解決という学習過程において個人内学習や話し合いの場で生じた考えや思いを整理するために文章化することは学習を深化させる上で重要な活動であると考えた。

このように、学習過程で産出される「思考」の蓄積が相互に影響しあいながら「課題化・定着化」を繰り返すことで学習内容がより高度な内容へと進化していけるのではないかと考えている。

最後に、物語的文章の学習を考えるなら、文章の意味を知るために言葉や文字を正しく知ることが起点とし、自己の生活経験にも照らし合わせ、イメージをふくらませながら文章表現に即して自分なりの読みを大事に文章理解させたいと考えてきた。それは、文章の内容に感動し、共鳴し自己の考え方や行き方に影響を及ぼすような読みの出来る子を育てていきたいと考えた。そこで、授業の場において、自分なりに考えたことや思い等を出し合い聞きあう場をも大切にしてきた。

(2) 物語的文章理解のために

① 比較を駆使した文章理解について

文章理解のために「比較」を学習に取り入れる際、「何と何を比較させるか」という比較対象についてや「どういう目的のために比較するか」という比較の効果について、「比較する際」には目的意識を明確に持ち学習に組み込んでいかなければならないと考えた。

つまり、「比較」を学習そのものの目的とするのではなく、文章(作品)理解の目的に対する認識手段の一つとして「比較」を駆使してきた。

また、「比較対象」においても物語的文章中の比較操作に留まることなく、作品中の文章理解を目的とした活用を起点とし、作品対作品というような広範囲にまで「比較操作対象範囲」を広げ、同一作者の「作品群理解」や、多くの作者による登場人物等の「類似作品群理解」にまでにその活用範囲を広げたいと考えて実践してきた。それは、これらの学習活動の蓄積が、やがて「本の世界を広げる」という命題に到達しうる可能性の高い一方略ではないかと考えたからである。

② 五感を駆使した文章理解と文章化について

文章理解のために「比較操作効果の活用」を基盤に「五感に関わる表現を大切にした文章(作品)理解」を考えてきた。それと同時に他方では「五感を通して文章化をはかる」ことも考えてきた。この表裏一体を形成する2つ学習の相互作用による効率的な理解・表現という学習を成立させたいと考えて実践してきた。

ア、五感に関わる表現を大切にした作品(文章)理解

登場人物の言動は言うに及ばず「情景を理解する」ことは、作品全体にわたるテーマや作品内

容を理解するための大切な学習要素の一つだと考えた。

そこで私は、物語的文章の文章(作品)理解の方略の一つとして「五感を駆使した文章理解」に着目することにした。それは、「目で色や形状を感じること。」「鼻で匂いを感じること。」「手触り等体の全部または一部形状や温度や触感を感じること。」「耳で音を感じること。」等々である。

これらに関する事を記している文章に立ち止まり、その内容を感じ取ることで単なる文章理解から作品全体の理解にまで、理解効果を上げ高めていけるのではないかと考えたからである。

このように、「五感に関わる表現」(以下「五感に関わる表現」を「五感表現」と記す。)について、五感を十分意識せず単なる言語的意味理解の段階に留まることなく、個人個人の経験や体験をも想起させ、疑似体験的な要素を「言葉」から得られるように可能な限り「五感表現」を身近に引き寄せ受容できればと考えているからである。したがって「五感表現」を文中から見だし、その表現に着目させる中でその情景を十分に想像させる学習を展開する事が作品理解の大きな一助となるのではないかと考えたからである。

イ、五感を大切にした文章化

「五感に関わる表現を大切にした文章理解」と一対を成す学習として「五感を通した文章化」を考えた。言葉(文章)から五感を使った「受容能力」の大切さを考えるなら、その対面にある子供達自身が自然や社会から「感覚器官」「心」を通して情報を受け取るための「柔軟かつ繊細な感覚器(受容器)」「(敏感かつ繊細な需要器官)作りが大切ではないかと考えたからである。

②文章理解についてさらに着目する対象について

読み手に感動的な印象を与える物語的文章の言語因子について考えてみた。そこで、今回は言語因子の3つについて、学習を進めていく上での「直接的な視点」として設定した。

ア、会話文に着目

作品の場面内容や人物の性格をとらえるためには会話文を読み取ることが重要だと考えている。会話文すなわち言葉による働きかけが登場人物の性格を表すのは言うまでもなく、その判断、評価、欲求なども読者に伝える重要なキーワードだとも考えている。

イ、行動描写に着目

動作は登場人物の気持ちや態度を直接的に映し出す表現であると考えている。また、視覚的イメージを想起させることは言うまでもないことであるが、そこでその行動を表現した文章や、その前後にある登場人物の行動を「比較」させることにより、より深くその行動の象徴的イメージを感じ取る事が出来るのではないかと考えている。

ウ、具体名詞にも着目

読み手に感動を与えるような文章の場合、必ず感動を操作するために物語にはそのキーワードとなる「※具体名詞」が組み込まれていると考えている。またそれは、物語の時代背景や登場人物がおかれている状況を想像させる事の出来る要素をも多く内在し、作品の持つ味わいを直接的に読み取れる「部品」であると考えている。そこで、具体名詞にも着目させることが作品(状況等)をとらえる為の方略の一つではないかと考えて、必要に応じて適宜学習に組み込む事を考えた。

特に「白いぼうし」「ごんぎつね」の学習では、「色彩や匂い」を表す名詞や、それを想像出来る名詞に着目させ、作品のおもしろさに迫せた。

(3)本単元「ごんぎつね」での教師の願い

一つの事柄(行為)に対する多義的な意味理解について考えるなら、多くの児童は一義的つまり行為の直接的な一次理解にとどまっている。つまり、前単元の「一つの花」学習を引用すれば「むちゃくちゃに高い高いする」父親の言動から「ただ、ゆみ子を喜ばせている」という一次理解のレベルから「親の無力感、やるせなさ」を感じ取るという高次な読みへと深化させなければいけないと考えてきた。また、本単元でもこの様な多義的かつ高次な読みが出来ていけるよう指導してきた。

次に、登場人物の人柄や心情を捉えるという学習についていうなら、登場人物の言動から登場人物の人柄や心理状態(感情)や、その継続線上に位置する変容を学習した。その際、作品中に出てくる「言葉や行動(キーワード)」について、その個々について意味する内容の違いを比べる事を意図し「心情の色彩化」を促した。また、捉えた色彩的イメージを読み手を意識して文章化する

学習をも行った。それらは、その時々主人公の心情やその状況の違いを明確化するための一方略として試みたのだ。本単元においてもこのような方法を駆使して文章に対する子供達の想像力や思考力そして表現力を高める事を目指したのだ。

(4)教材について

本単元の学習を進めていくにあたり、「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」に象徴される「孤独感」や「共感(心理的距離感)」を重要なポイントとして学習を進めてきた。

それは、「ひとりぼっちの小ぎつね」や「少し離れた山の中」という住みからもその片鱗が現れている。つまり、家族のない「小ぎつね」であり、「山奥ではない」ということから動物界からも人間界からも距離を置く孤独なごんの姿を想像することも出来よう。

ごんの行為や心情をたどると、ごんは自分のいたずらがもて「兵十の母」を死に至らしめ、兵十を「ひとりぼっち」にしてしまった。と一方的な想像による反省をする。それと、彼が一人になった姿を見て「俺と同じ兵十か」という同胞意識を持ち、兵十を「孤独」に追いやった原因のすべてが自分のいたずらであるかのように反省する。その思いが「いたずらばかり」していた「ごん」が「つぐない」の行為へと変化し、危険を顧みず無償の行為へとごんを駆り立てていったわけである。

次に、ごんの行為でもう一つ目を向けたいことがある。それは「無償の行為」のみではなく「引き合わないなあ。」に代表されている「兵十に自分の行為を理解してほしい。」という点である。幼さも手伝ってではあると思うが、「自分がしていることを分かってもらっているのではないかな？分かっているほしい。」と密かに願っていたごんが耳にした言葉は「神様の仕業」として村の者や兵十に償い行為を処理されてしまった現実を目の当たりにし、「引き合わないなあ。」とつぶやくごんの心情。そして、その後も懲りずに健気にも食べ物を運び続ける行為の裏にある、ごんの複雑な心情をも理解させたいと考えた。

やがてこの行為が痣となり、兵十に撃たれる直接的な原因となるのだが、ごんの最期の「分かってくれた」「分かり合うことが出来た。」という「達成感・成就感」ともいえる心情と、それを象徴する行為としての「うなずき」を理解させたいと試みた。

また、共感の後に訪れるであろう「ごんの死」が、皮肉にもごんにとって一番避けたいと考えていた「永遠に孤独になる事」ということにもテーマ性からではあるが、少し触れてみることにした。

2 実践の考察

(1)単元について

前述のように、「比較」「五感」「登場人物(会話・行動描写)」「具体名詞」「文章化」というような項目を掲げそれをベースに効果的な物語的文章の文章理解の方法の確立を目指し取り組んできた。

本単元の学習は、「孤独」ということをキーワードとしながら、ごんの心情を中心に兵十との関係や心情的距離感を比較を通して考えさせるとともに、「孤独」につながる内容であるが、言葉の持つ多義性に気付かせるという点で「いたずら」という行為に潜んでいるごんの心情。「撃たれて死に至る」という非情さと、皮肉にもその行為により「分かり合えた喜び」といった「行為と感情の二重性」や「言葉の多義性」にも目を向けさせて理解を促してきた。

①「孤独」「交流」という視点から

「孤独」という点から考えるなら子供達は、当初ごんを「いたずら狐」という視点で、すごく悪い事をする狐で、これはいたずらの範囲を超えているという見方をしていた。それが、兵十の母親の死によりごんの行動が変化(急変)するところからごんの「寂しさ」といたずらとの関係が意見の中に多く出ることとなった。つまり、いたずらの背後にある「何か」を子供達は探りはじめたのだ。それが、幼さゆえのごんの思いこみ、人との交流手段の未熟さ、行動の幼稚さ等、ごんの身の上という点から「ごん側」からの視点加わりはじめた。つまり、「ひとりぼっち」というキーワードが子供達の思考の中に生き始めたのである。

このようなことから、一方では「孤独」をキーワードに物語を読み進めることとした。すなわち「孤独・共感・交流」を原点としての作品追求が始まったのである。

②「ものの二重性」「多義性」という視点から

思考の方向性ということから考えると物語的文章の中には二律背反的要素が多数存在している。例えば「ごんのいたずらについて」では「村人は辛い、に対し、ごんは楽しい」や「イワシを盗んでほりこむ」では「ごんにとっては良いことをした、に対し、兵十はひどい目にあった」や「撃たれてうなずく」は「ごんの死は悲しい、に対し、ごんがうなずいたことはうれしい」等、一つの言動に対し立場や見方の違いから多様な読み取りが可能であり、また、多様な理解をそくさなければいけないという点から多様な読みの出来る子を目指して取り組んだ。

このように、物語を大きな視点から切り込んで理解させようとして取り組んだ。しかしながら文章化については個人差が甚大であるので個別指導の必要性を強く感じる事となった。

(2)着目児について

着目児Aは、発想が豊かで多様な見方の出来る子でもある。しかしながら発表に対しては消極的な面が多く、ユニークな視点で物語的文章にメスを入れて解明しようとしているにもかかわらず、学級全体に対し影響力の出ない子であった。そこで、「文章化」の取り組みにより、発表するために思考内容を整理することを指導してきた子供である。

ア・ごんは悪い賢いと思います。それに「お願ひ、かもてえ。」と言ってるかそれとも退屈で「まあ退屈のぎにしよう。」という風に考えていると思います。いっぱい悪さをして村人達には迷惑だけど、ごんにとっては楽しい遊びだと思います。
イ・今までやめようとしなかったいたずらを急にやめて、反対に償いを始めた理由を考えました。ごんは今まで「命」に関わるいたずらをしていないと思います。畑に入って芋を掘り散らしたり菜種がらの…。これは命に直接関係ないからです。雨上がりからのいたずらから様子が変わって、ウナギが踏み殺してしまうし、ウナギを食べられなかったせいで兵十のおつかあが死んでしまったしねそのせいで、兵十を一人にさせてしまった。とごんは思いこんだからだと思います。
ウ・ゴンは栗や松茸を持って兵十に届けるのは、始めて自分でしたことです。今までだったら盗んだりした物を兵十に渡したり自分の物にしていたけどこれは大きな変わり目だと思います。そして分かってもらえなくても運び続けるごんの心はすごいと思いました。
エ・撃たれて死んでしまう事より、兵十に分かってもらうことの方が大きかったように思いました。ごんは「命」よりも分かかってもらうことの方が重かったんだなあと思いました。

上に示したのは着目児Aの文章の一部である。当初の意見の大半は「悪い狐」という点で始終していた。しかしながら、A児の「命」という点についての話題に入ったとき、彼女なりの「いたずらと償い」の関係が他の児童に新発見として受け入れられた。それを契機に彼女の「ごんの心情・行動変化の原因を究明する」という学習活動に火がつき彼女なりの探求学習へと突き進むこととなった。そして、話し合い活動においてウ、エ、の様な考えを随時授業の場で発表できるようになった。その発表できたという自信がまた、相乗効果を生み「思考の文章化」と共に向上を見せた。このように、自己変革を少しずつ成し、それが他の児童にも思考の多様性について一つの示唆を与えるという結果になり他児にも影響を与える事となった。今後も自分の思考に自信を持たせて表現を促していきたいと考えている。

3 今後の課題と展望

物語的文章の文章理解という点から「文章理解における比較の効果的な活用法」「思考の深化を促す文章化の視点について」「五感を意識した文章理解や多様な文章表現方法」等、物語的文章の文章理解や思考の有効な文章化を研究課題として取り組んできた。

本単元についても、前述した内容を学習内容に盛り込み授業を展開してきた。今後は既習の学習パターンを基に、児童自身が自主的・自発的に活用し自分に合う方法で文章理解を促すような学習法の定着を計っていきたい。また、「比較」についてもその課題に即した「比較対象」をみだし比較することで自分なりの課題解決や文章理解をしていけるよう指導していきたい。

4 実践研究テーマの設定

今後も研究主題として「物語的文章の文章理解に及ぼす効果的な比較法の研究」そして、副題として「児童の比較概念に基づく指導法の検討」に取り組んでいきたいと考えている。その際、児童の「認知発達」と「日常比較」との関係も考慮しながら、有効的な「比較法」をさらに究明していきたいと考えている。